
もこまち

薬丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もこまち

【Nコード】

N6398Z

【作者名】

薬丸

【あらすじ】

昼寝の場所として迷いの竹林を選んだ小町のお話。

pixivで載せていたものです。

(前書き)

小町があたいという点、妹紅は原作よりの性格という点にご注意です。

「お、よっと」

鬱蒼と茂った竹の森。

空に太陽が燦々と輝いているのに、ここには薄くしか光が届かない。まるで深い深い海の中。

「いいじゃないか、あたいは好きな雰囲気だよ」

光は薄く、通り抜ける風は優しく、運ぶは淡い草の匂い。

「昼寝するには最高の環境じゃないか。

来て良かった」

もつとも、来た理由は昼寝じゃあないのだけど。

「あゝ、場所に迷ったわけじゃないけど、探し人が見当たらないのは迷子だよなあ」

迷いの竹林。

名は伊達ではなく、とにかく広い。

更に言えば似たような竹林風景が続いて気付かないうちに知覚が狂ってくる。

確かにこれは、普通の人間だったら惑ってしまうだろう。

「これ以上の酔狂は時間が勿体無い、か。

こうなったら順序を踏もう…永遠亭の兎にでも案内を頼もうかね」

なんとなく、自然と会いたかったのだけど。
うまく行かない。

そんな所でぎっぎと、落ち葉を踏みしめる音が聞こえてきた。
ああなんだい、見放されてなんてないじゃないか。

「面白い？」

「……さっきまではそうだったけど、今は違う」

「そうなんだ、無駄足だったのかな」

「いや、あんたがどっか行っちゃまうとまた迷ってしまう」

「？」

「あたいはあんたを捜してたんだ」

「へー私に用って人は珍しい…輝夜関係？」

「月のお姫様は関係ないよ、あたい個人の興味本位さ」

「ますます珍しい。」

「私に興味を持つ奴が、慧音以外にいるなんて予想外」

「おお、良かった。会話が成り立つ人で。」

少し心配だったんだ、竹林に入り浸ってるって聞いてたから、変わった奴だったらどうしようって」

「なにそれ、少し失礼に感じるのは私の気のせいかしら」

「良い意味、さ。」

悪い想像が外れてたって事は、好印象だったって事だろう？」

「問題は言い方。」

まあそれはいいわ、とりあえず用件を聞きましょう」

「ここですかい？長話になるかもしれないから、少し勿体付けさせてよ」

「なら風景の良い川辺でも案内する？」

「いや、川は見飽きてるからいいよ。」

できるなら陽と風の心地良い場所をお願いしたい」

「そうね、いいわよ。」

珍しい客人だから、お気に入りの場所に案内してあげる」

「そいつぁ有難い。早くも用件の一つが解決したよ」

「一つ、ということはまだあるのね？」

「そうさね、その場所に案内してもらってから言わせて貰うよ」

本当は勿体つけることでもないのだろうけど、なんだろうか。

彼女もそういうやり取りを望んでいるような気がした。

落ちて積もった笹の葉を踏みしめ、足音二つがゆっくりと時を刻む。焦る必要なんてこれっぽっちもなく、ただ穏やかであれという心がある。

「まずは名前を言っておくよ、あたいは小野塚小町。
呼び方にこだわる性分でもないから、好きに呼んでおくれ」

「なら今は小町さんと呼ぶことにするわ。

私は藤原妹紅、今はここで迷い人の護衛を生業にしている根無し草。
呼び方は自由、変な名付は子供たちで慣れてるから、多少のものは許容できるよ」

「あたいは妹紅って呼ばしてもらおうかな。

不躰かも知れないけど、私の自然さを取らせてもらうよ。
違和感持って呼ばれるよりはいいだろう？」

「別にいいわよ。私も立ち位置がはっきり決まればさんを抜かせて
もらうわ」

「立ち位置？」

「ええ、貴方が何者か全然分かってないもの。

敵意は無いみたいだから気を抜いて迎えてるけど、不安ではある」

「あー催促される理由も重々承知してるんだけど、今言うと話がこ
じれるかもしれない。

だから腰を落ち着けて、気持ちに地に着いたら言おうと思うんだ」

「……貴方からは善い人の、というよりお人よしの気配がするわ」

「そうかい？ そんなこと初めて言われたよ、私の風評は悪いものば
かりなだけだね」

「お人よしでも悪人はいるわ。善人だからと言って罪を犯さないわけじゃないでしょう？」

「…あんたは正直者らしいね」

「善人故ではなく、捻くれ者という意味ではね。
私は他人に正直なんじゃなくて、自分に正直なだけだから」

「かもしれない、まあけどあたいはそれを好感と捉えるよ」

「あらそう。私も貴方の事、結構好きみたいよ」

「あー…あんたが本当に正直者なら、根は悪人だな。
笑顔でさらりとそんな言葉が出るんだから、人の心をかどわす素質があるよ」

「根が悪で既に罪人、私に救いは無いみたいね」

「それを簡単に、気負わずに言うのだから、なんて返せばいいのかわからないよ」

「ならこの話題は終わりにして。」

ほら、新しい会話を始めましょう」

竹林に塞がれていた視界が急速に開ける、唐突な光に閉じる瞳。
目を瞬かせ、色圧を調整した先は光の輪があった。
円形に切り開かれた木漏れ日の場所。

「これは……随分と綺麗なとこだね…」

「古い古い戦場跡が、時間と自然の力で癒された結果よ」

「へー、ここは昔戦場だったのか」

「二人だけの、ね」

「ああ、噂には聞いてるよ。

月のお姫様と仲違いをしてるそうじゃないか」

「ええ、だから最初は貴方があいつの手先じゃないかと思ったの」

「ああ、そうだね。

そろそろ正体を明かしてもいいかな。

ここなら落ち着いて話が出来そうだし」

「ゆっくりと腰が落ち着ける場所っていったら、晴れてる日は此処が一番」

「みたいだね、ここは陽光が溢れんばかりに留まってる」

二人は光の輪の中心で、向き合うようにして座った。

静謐な空気、しかし穏やかな雰囲気。

ここでは全ての会話が柔らかくなるような、そんな気がした。

「まずは私の素性を晒そうかね。

一番気になることだろうし、それにこれを受け入れてもらえれば後が早い」

「ええ、ここまで勿体を付けてくれたのだもの。半端な気にしようじゃないんだから。」

人間でも魔法使いでも妖怪でも妖精でも幽霊でもない、貴方は今まで私が見たことの無い種別なんだもの」

「そりゃそうだろうね、私は死神だもの。」

あんたとは最も縁遠い種族さ」

「……」

「驚いたかい？」

「…ええ、驚いた。なに？ 迎えに来てくれたの？」

「……一番して欲しくない表情だ。あんた、なんて嬉しそうに笑うんだよ」

「連れて行かれるんじゃないって、分かってるからの余裕」

「そうなんだろうけど、死神に笑いかける人間は不吉そのものなんだよ」

「あら、死神こそ人間にとっての不吉の象徴でしょう？
怖がってどうするのよ」

「この広い世界には死神を追い払える枠を外れた人間っていうのがあるのさ。」

まあ魂を狩る死神から聞いた話だから、船頭止まりのあたいには直接関係無いんだけどね」

「ああ、船頭さんだから川は飽いているのね。でも更に謎は深まるわね。」

船頭さんが迷いの森に何の用があるのかしら？」

「あ、いや、本当に大したことじゃないんだ。

昼寝しやすい場所を考えて真っ先に浮かんだのがこの竹林で、此処の事に詳しくて話し相手に良さそうなのがあんただったって言うだけなんだ……けど」

「……少し拍子抜けだけど、納得ではあるかな」

「ああ……ここはあんまり言いたくなかったけど、理由を聞かれたら他に答えようが無いんだよなあ。

……やっぱり呆れた？」

「いいえ全然。理由なんて軽ければ軽いほど、会った後が楽でいいわ。

お前の人生を戴きに来た！とか言われても困るだけだもの」

「まあそれもそだね。

なんだい、気にしてたあたいが馬鹿みたいじゃないか。
歓迎されてるみたいでほっと一息だよ」

「ええ、本当に歓迎してるのよ。

人間長く生きると未知がなくなっただけで感情が動かなくなってしまうから、この邂逅は嬉しいの。

会いに来てくれてありがとう、久々に心がときめいたわ」

「ああ、いや、あんたの方からお礼を言われるのはなんか違う気がするんだけど……

まあいいや、あたいもありがとうと言わせてもらう。

それであいこにしよう」

「貴方は真っ直ぐなのね。どこぞの偏屈なお姫様と違って良い付き合いが出来そうだわ。」

でもなんで昼寝をするのにここまで来る必要があるの？

確かに三途は寝にくそうだけど、それでもここより近い場所はいっぱいあるでしょう？」

「いやさ、仕事の息抜き手段に睡眠っていう方法を取るんだけど、上司の閻魔様に見つかったら気が抜けてると怒られるんだ。」

だから閻魔様に見つからず、元より来ないような場所じゃないと駄目なのさ」

「さらりと、当然のように駄目さ加減を晒すのね」

「船頭担当の死神はいっぱいいるからね、あんまり送りすぎると閻魔様の負担になるのさ。」

そういうわけで、あたいは需要と供給の均衡を保とうと、働きたいという心を殺してるのさ」

「詭弁とすぐに分かるのは、貴方を理解できてきたということなのかしらね。」

ふう、でも閻魔様って審判所に籠ってるものじゃないの？ちよつとの休憩じゃばれないでしょ」

「あの人は職業柄説教説法が大好きで、最近じゃあ結構な割合で幻想郷に足を延ばされるんだ。」

そうなると必然的に三途の川周辺は駄目、白玉楼や神社、妖怪山も説法しやすいのが集まるから駄目。」

となればだ、残りはここしかないだろう？」

「そうね、ここには説法をする相手が兎しかないし、やってくるのは診療目当ての里の人間がほとんど。」

永遠亭の主人である輝夜も竹林の案内人である私も人を呼びたがる性質じゃないし、私達自体には説法をしても意味が無い」

「そういうことさ、説法は綺麗に死ぬ為のものだから、死なないあんた達は四季様の慮外。」

だから真っ先にここに着たんだ」

「うん、納得納得上機嫌。」

輝夜じゃなくて私を訪ねた事を嬉しいと思うし、この陽だまりを褒めてくれたことで感慨が深まったことが更に嬉しい。

心の靄と頭の霧が晴れ渡るかのよう」

「あんたは綺麗に、簡単に笑うんだね。少し驚いたよ」

「こっちが恥ずかしくなりそうな褒め言葉ね。いや褒めてないのかな。まあいいけど。」

それで今日の目的は達せられたのかしら？」

「ん、九割がた達成したよ。」

あんたと話して人となりを知る。昼寝スポットを教えてもらう。最後に」

「この手は友好の証でいいのよね？私を三途へ連れて行く合図とかだと困るんだけど」

「そこはあたいを信じてもらうしかない」

「明確に否定しないし：でも決まってるわ。
もう何箇所か良い所を教えてあげる」

差し出した手は上下に振るためではなく掴まれた。

まるで友を遊びに連れ出すかのような気軽さで手を引っ張られる。
こうしてあたいの最後の目的が、『善き人と友となる』が達成されたのだった。

「なんだいなんだい、迷いの竹林なんて色気のない名前返上しちまったほうがいいね。」

同じ様な光景がずっと続くから方向感覚がズレていく、変化が少ないから”ずっと”なんて錯覚を引き起こす。

なんてありや嘘だ、風景なんて足を一歩踏み出せばそれだけで変わるもんなんだ……ってようやく理解したよ」

「距離を操り川を引き伸ばす貴女には理解し辛い感覚かもね、貴女の一步と私達の一步は全然違うから」

「ああ、違うない。元より風景になんてときめいたことのないからね。」

人が目にする光景風景って言うのは、移動の中にこそ見るものだから」

「極論だけど、そうなのよね。人は景観を楽しむに行くというお題目で道程を楽しむ生き物だもの」

「ああ、ここに至って、お勧めの場所を案内してもらった所で、そんな事を学べたよ。」

単調と思っていた竹林風景も気にしてみるとこれほど変化起伏に

富んだ場所だとはね」

「自然が作り出したのだから、変わらないなんて不自然を作り出すわけがないのよね。」

全てが均一に生えているわけじゃないから歩くのが困難な場所もあるし、逆にぽっかりと口を開けた様な場所もある。

降った雨を流す川もあれば、風を受け流す風洞になっているところだってあるわ。

余裕を持って見て見れば、ここは些細な変化で溢れてる。

まあ中心近くは結界があるから絶対に迷っちゃうんだけどね」

「……あんたは、ここが好きなんだな」

「好きになる努力をしてるもの、当たり前じゃない？」

「そりゃそうだね、好きな場所だから留まりたい。」

だから留まる努力を欠かさない、本当は当然のことなんだよねえ」

「そうだけど、少し語感が違うかなあ。もうちょっと切実。」

私はもうここしかないから、嫌いになっちゃ駄目なのよ」

「……あー墓穴掘った感じ？」

「お墓なんて二人共に必要ないものだし、気にしなくてもいいじゃない。」

まあでも気にしてしまうのなら、話題の転換でもしてくださいな」

「ああ、じゃあ根本的なことを聞かせてもらおうかな。」

陽だまりの古戦場や清流の岸、笹葉の寝床なんか色々教えてもらったけど、次は何処に向かってるんだい？

もう竹林を抜けちまいそうじゃないか」

「今までは貴女にとって良い所を、次は私にとっての良い所を」

「?？」

「私だけじゃあ手を焼くから、貴女に手を貸してもらって焼けてもらおうかとね」

「なんだいその不吉な言い回し：

でもあれだけの借りを作ったままじゃあいけないのも確かだ。
いいよ、手でいいなら貸すよ。それで貸し借り無しといこう」

「あらいやだ、友達に気を使わせちゃったかしら」

「これぐらい気遣いでもなんでもないさ、あんたを手伝いたいと私が勝手に思ったんだ。

友として勝手にね」

「あははっ、こういうのいいなあ。

あの子とじゃあこうは行かない」

「あの子？」

「うふふっ、ほら、あけたわよ」

会話に集中していたからだろう、密した竹が急に開け、遮る物の無くなった陽光が一瞬視界と意識を焼いた。

不意打ちで少し混乱してしまうが、近くに妹紅の気配を感じて気を立て直す。

慌てたみっともない姿を見られたくないと気取った態度の表れは一呼吸を置けば完璧に形を為した。

目を閉じ、瞼の表に強い光を感じてしばし待つ。

そして落ち着きと共に目を開けば。

「人間の里？」

「ええ、人間の里へと続く小道。

これから貴女には私の友達と会ってもらって、その人のお手伝いを手伝って欲しいの」

「あまり体力を使うようなのは嫌だけど、大抵のことは手伝わさせてもらうよ。

それで、会わせたい人って言うのは満面の笑みでこっちに手を振ってる人？」

「大正解。上白沢慧音といってね、幻想郷の歴史を編纂してるワーハクタクよ。

善良というなら彼女ほど善良なやつを私は知らない」

「で、その慧音さんってのはなんで急に走りだしたんだい？

それでなんか鬼気迫ってるように思うのは気のせい？」

「予定調和を好む子だから、私が時間に遅れたのと連れが居ることを訝しがっているんでしょうね」

「ああ、あたいだけが睨まれてる気がしてたのは気のせいなんだね」

そして走り出した女性はあたいと妹紅の間に滑り込むようにして止まり、背後に妹紅を隠すようにあたいと相對する。

警戒感むき出しで睨まれる覚えは今のところなかったはずで、あたいは少なからず混乱していた。

「…お前は何だ？」

「なんだとはいきなりな挨拶だね、あたいは妹紅に仕事を手伝って欲しいといわれたから…」

「私は、お前が何なのかと聞いているんだ。
幻想郷の歴史を創っている私が知らない登場人物、警戒しないはずがないだろう」

「あー慧音、それについては」

「妹紅は少し黙っていてくれ。どうせまた竹林に居たからといって保護してきたんだろうが…」

全く、これが危険な漂浪人であつたらどうするんだ……

それで君、答えてくれるか？」

「確かに、あそこは幻想郷の外と言えなくもないか……あんたが把握してないのもしかたないのかもね。

あたいは彼岸で船頭をしている下っ端死神さ」

「死神…だと…？」

「ええ、名前は小野塚小町さんといって、私に会いに来てくれた客人なのよ」

「妹紅に会いに…だと…？」

「あー、ちよつと妹紅？」

これから説明しようと言うところに入ってきてその端的過ぎる言葉は誤解を招きかねなくてだね。

あたいが最初にした危惧が現実のものになっちゃうわけだね」

「倒すぞ妹紅！死神が来ても返り討ちにさえすれば生き延びることが出来ると聞いた事がある！！」

おい死神！妹紅は絶対に渡させないぞっ！！」

「言わんこっちゃない…いやあのね慧音さん、あたいは別に妹紅の命を狩りにきたわけじゃなくてだね。

…って妹紅！あんたも笑ってないで説明をだね！」

「あははははっ！！今日は本当に面白可笑しな日だわっ」

「????」

妹紅？なんで笑ってるんだ？」

「ああ、お腹を抱えて笑ってる人は放って置いてだね。色々と説明したいんだけどいいかい？」

「えっ、ああ、はい。お願いします」

口と腹に手を当てる笑いはなしの妹紅を見やって、互いに困り顔のあたいと慧音さん。

説明をして、挨拶をして、ようやく誤解を解いたところで、ついにはあたいも笑い出してしまった。

慧音さんはやれやれと、やけにしっくりとくるような表情を浮かべて微笑んだ。

なんとも可笑しな邂逅ではあったけど、多分これは正しい出会いだ

ったと、今にして思う。

「本当に申し訳ない。

冷静さを失っていたとはいえ、訳も聞かずに敵愾心を露にしすぎた。

すまない」

「いいさ、いきなり死神がやってきたら誰だってそうなるさ。

まあ誰が悪いんだって言ったら、ただ笑って状況を楽しんでた妹紅が誰より何より悪い」

「あんなに笑っちゃう状況じゃあ何も言えなくなっちゃうはしょうのない事じゃない。

でも私が悪者になってあげる、この場を丸く治めるために」

「偉そうに言うじゃないか。あとできっちり言わせてもらうから心積もりする事だ。

それで小町さん、本当にいいのか？私の仕事は結構大変だぞ？」

「ああ、友人の頼みでもあり、新しい友人の仕事の負担を軽く出来るからね。

それで、何をすればいいんだい？」

「ふふっ、妹紅が気を許すわけだ。

すんなりと気負わずそれが言える貴方はきっと善い人なんだな。

で、妹紅。お前何も話してないんじゃないか」

「いいじゃない、人生には不安と期待と驚きが大切なよ。
それに小町ならうまくやってくれるって自信があるの」

「相も変わらずいい加減だな…と、もう着いてしまったか」

「ここは…寺子屋かい？」

「そういうこと。ここで手伝う内容はお守りでした」

「あー途端に心根が折れ曲がりそうだよ…一対一で話すのは慣れるんだけどね、大勢なのは不慣れだよ。

しかも船に乗りに来ない子供が相手ときたか」

「あら羨ましい。

不慣れは新鮮の同義語、しかも人との関係を紡げる。
いい事尽くめね」

「そうは言ってもね、あれだ、傷つけてしまったりとかするかも知れないわけでね、やっぱり怖いよ。

どう扱っていいのか、どう接すればいいのか、どう話せばいいのか、何一つわからない」

「そう気負わなくても、一人ひとりとしっかり向き合ってさえいれば大丈夫さ。

子供というのは実に強い存在なんだ。現在の全てを糧にして未来へ生きる存在だからな。

まあ実際に体験してみたらわかることかな」

慧音さんは朗らかに笑い、戸を開ける。

緊張の糸が張り詰める。

慧音さんを先頭に戸をくぐり、妹紅が後に続き、あたいもぎこちらなく前へ。

戸を閉め、振り返れば騒音。

「先生こんにちはー！」

「あっ、妹紅ちゃんもいるよっ！」

「やった、お勉強の後おままごとしよー」

「駄目だ、妹紅姉ちゃんは俺らと外で遊ぶんだ！」

途端、十人ほどの子供が二人を取り巻く。

6歳〜10歳ぐらいの子が男子女子入り乱れ。

はしゃいだ声、楽しそうな表情、元気な身体を目一杯に使って全員が二人に好意をぶつけている。

圧倒される活力。あたいとは縁の無かった現状。

あたいは完全に戸惑い、気後れをしていた。

「あれ、知らねー姉ちゃんが居る？」

「あーほんとだー誰誰ー？」

気付かれた。

十人の目が一斉に私へ向く。

思わず目を泳がせて、口元が引きつりそうになった所で。

「その人は私と慧音の友人で、小町っていうの。」

とても善い人だから甘えなさい」

妹紅が悪戯好きな瞳で私を見る。

慧音さんはとても穏やかに微笑んでおられる。

妹紅の言葉を聞いた途端。

「「わーわー」」

もみくちやだ。

「うわーすごいふかふかー慧音先生ぐらいー」

「小町姉ちゃんは何んか外での遊び知ってる？俺教えてやろうか？」

「小町お姉ちゃんってなんか優しそうな雰囲気だから、お姉ちゃん役やってよー」

緊張に固まった身体がほぐれる。

子供達の態度があまりにも自然で、笑みがこぼれた。

「ああ、全部相手してあげるからさ。

今は勉強しときな、遊ぶのはそれからだ」

近くに居たやんちゃそうな子と大人しそうな子の頭を撫でて言う。

「「はーい」」

「おいみんな、早く終わらせて遊ぼうぜー」

「うん、そうだね！」

元氣一杯に散っていく子供達。

「あはは、さっすが小町ね。もう手懐けちゃって」

「とても良い感じだったよ小町さん。

それじゃあ皆が大人しくしている内に始めよう。

小町さんは妹紅と一緒に後ろで子供達を見ていてくれ」

優しい笑みを浮かべて慧音さんは教壇に立ち、話し始める。

最近里で起こった事、妖怪の動向や危険地域への注意、その他連絡事項を伝えた後、勉強の話へと続く。

それをあたいと妹紅は部屋の一番後ろで聞いて見ているのだった。邪魔にならないようにと黙っていたのだけれど、半時ほどで痺れを切らしてしまう。

「なあ妹紅、あたい達は話し聞いてるだけで良いのかい？」

「そうね、授業中でやることはほとんどないわ。

前ははしゃぎすぎる子を叱ったりしてたんだけどね、今じゃ皆すっかり素直だから」

「それじゃあ本番は勉強が終わってからってことかい？」

「そういうこと。だからそうね、今は私の退屈を紛らわせるのが小町の仕事」

「ははっ、あたい達が怒られないようにしなきゃだね」

二人で笑い合い、子供達の真剣な様子を見ながら静かな歓談を楽しむのだった。

「小町姉ちゃん次俺達の番だろー！」

「ええーまだ短いよー！」

「こらこら、あんた達の方がさつき長く付き合っただろう。順番を守らないと何事も先に進まないんだから、もう少し待っておくれよ」

「小町お姉ちゃんは今度お母さんね。」

小町お母さん！」

「あははっ、子守も子育てもしたこと無いんだけどね。お母さんって何すれば良いんだい？」

「んーと、お家の事全部？」

「その家の事がわからないんだけど・・・」

「そーなの？変なのー」

「はは、お母さん役は慧音に任せようかな。慧音なら完璧だよ、多分」

「小町さん、私を巻き込まないように。今は次の教材を作ってるんだから・・・」

「なら小町お姉ちゃんはお父さんね！慧音先生はやくー！」

「ごめん、手遅れみたい」

「慧音先生はどんな役でもとっても上手なの！」

「そうなのか。でもお父さんって何すれば良いんだい？」

「・・・？」

「はい、小町退場。子供達のお父さん役は私がやります」

「あれ、妹紅？さっき男の子達と遊びに…」

「私は疲れたので、小町が行って来て」

「なんだ、逃げてきたのか」

「小町を助けに来たのよ。慧音、手伝って」

「ふう、仕方ない。少しだけ付き合おう」

「ははっ、ありがたく気遣いいただきとしようかな。

みんなごめんな、でも妹紅や慧音が付き合ってくれるみたいだからちよっと抜けさしてもらおうよ」

おままごとを楽しそうに開始した女の子達に背を向け、小さくほつと息をはく。

そうして私は外で待っているであろう男の子達の所へ向かう。

正直困っていたのだ、おままごとに付き合うことに対して。

お姉さん役ならまだ良かった。後輩達に付き合う感じでなんとかごまかせていたけれど。

家族と言う物を持たない私にはやはり違和感が付きまとう。

父母なんて、それこそ想像外の存在だ。

どういう感情を持ち持たれているか、どんな役割を果たしているかは船上で聞き知って理解できても、

話にも乗らない常識を私はことごとく知らない。

「筋を通し、順番を守るのは当然。とはいえおままごとをやるって事だけは後回しにさせて貰おう」

あたいは頭を振り、心を入れ替える。

厚意を受けたなら誠意で返すべきだ。

あたいの苦手を引き受けてくれた友人二人に感謝を返さねば。

「やんちゃ坊主達をしっかり楽しませて、友人二人に楽をさせなきゃだな」

そうしてあたいは子供達と日が暮れるまで遊びつくすのだった。

「小町お姉ちゃん！楽しかったよっ！明日も遊んでね！」

「小町姉ちゃん！今度は絶対に負けないからな！」

夕日に照らされ子供達が長い影を引きながら手を振っている。

あたいも全員に返すように大きく手を振る。

子供達の姿が全員見えなくなるまで手を振り、少しふらついてしまった。

それを隣にいた二人の友人が支えてくれる。

「つと、大丈夫か？小町さん」

「ああ、ありがとう二人とも。ちょっと気が抜けただけだよ。

…うん、大丈夫。離してくれていいよ」

「大丈夫ならいいんだけどね。でもそうだよ、小町すごく頑張ってたよ。

いつもふらついてたのは私だったんだけど、助けられたわ。

ありがとう！」

「ああ、私は小町さんが頑張ってくれたおかげで教材作りがとてもすんなりと出来た。」

本当にありがとう」

「えっ、いや、友人として当然と言うか。あはは、そこまで素直に言われると照れるね…」

「あはは！小町ってば顔真っ赤じゃない！」

「茶化すな妹紅。

…そうか、やけに素直だと思っていたが、お前狙って言ったな」

「なんのことかしら？私は育ちがいいからお礼はちゃんと言うようにしてるだけよ」

「礼を言うのはいいが…

全く、本心で言った私も加担したように見られるじゃないか」

「ぷっ、やっぱり良いね。

狙っていたって本心だって、あたいはすごく嬉しいよ。

うん、貴重な経験が出来た。

二人ともありがとう。素敵な場所を案内してくれて、素敵な繋がりをついでくれて。

二人と友達になれたことは文字通り、永遠の宝だよ」

「「・・・」」

「…どうしたんだい二人とも？顔が赤い？夕日のせいかな？」

「狙って言ったって本心で言ったって、あはは、確かにこれは反応に困るわね」

「ああ、あんな飾り過ぎのセリフをすんなりと言えろとは…」

「あたいは正直者だから言いたい事は言うのさ。
なんにしても、最後に皆で同じ思いを共有出来て良かったよ」

「まあ後が良いな。そうだ小町さん、もし良かったら私の家で夕食を食べて行かないか？」

「えっ！良いのかい？！」

「勿論だ、出来れば無縁塚や三途の川での話なども聞かせてくれ」

「それぐらいでご飯が頂けるならお安い御用！三途の川での仕事ぶりも…」

「仕事？…仕事っ！！」

「急に慌ててどうしたのよ…って、もしかして今日ってお休みをもらってるわけじゃないの？」

「あははー、すっかり忘れてたよ」

「ちょっと小町さん?!この夕日でも顔面蒼白なのがわかるんだが！」

「ごめん、慧音さん。ご飯はまた今度をお願いするよ」

「ああ、言ってくればいつでも用意しよう。寺子屋の方も時間があれば是非」

「今日は本当にありがとうね、小町に会えて良かった」

「うん、あたいもだよ。それじゃあまた」

「うん、また。仕事が終わったら顔を見せてね！」

そんなやり取りをしてあたいは二人の友人と別れ、四季映姫様の所へ帰ったのだが…

そりゃ滅法怒られましたよ、もうすぐで異変が起こりそうだったんだから。

残業に残業を重ねることが決定され、しばらく妹紅や慧音さん、寺子屋の子供達には会えそうもない。

「あー地獄だーお仕事の無間地獄だよ…」

休憩は離れて取ることが許されず、昼寝すら出来ない。

仕方なくあたいは三途の川原を歩くことにした。

すると声が聞こえてきた。

一つ積んでは、二つ積んでは…

以前では気にも留めなかった子供の声。

あたいは少し思案して、その子供の所に歩を進めるのだった。

「あんたは世に未練があるかい？」

(後書き)

緋想天EDに続くような形で終わり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6398z/>

もこまち

2011年12月21日15時46分発行